

---

# IS <インフィニット・ストラトス> Knight of Messiah

tasogaremono

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス>Knight of Messiah

### 【Nコード】

N1269S

### 【作者名】

tasogaremono

### 【あらすじ】

ISが開発され女尊男卑な時代に色々な手違い（神様の壮大なるミス）で他の世界から飛ばされた高校1年なりたて少年”神谷 影一”なぜか飛ばされた場所にISがあり、神様のいたずらなのかそれを起動させてしまう。そして、波乱万丈の学園生活が今始まった！

\*この作品には、オリ主が強えええ（チート）です。

\*不定期更新

始まりは、現実　これは、当たり前（前書き）

IS　正式名称>インフイニット・ストラトス<宇宙空間で活動することを想定して作られたものである。簡潔に言つと、飛行パワードスーツだ。そして欠陥的なことに男は、使えない。そういうものである。現行の兵器を圧倒的なその威力で破壊したIS性能差を見せつけられISが発表されてから今日になるまで女尊男卑な社会になつた。

そんな中、空には、一つの影があつた

始まりは、現実 これは、当たり前

「ああ〜受験の終わった〜」

周りには、普通の建物、澄み渡る青い空

いたって普通な世界でこんなことをいうのは、今作の主人公神谷影一である

「ねえ、かみやんゲーセンでもいかな?」

「うん? ああすまねえこれから行くところがあるんだ」

「どこいくんだい?」

「親父の墓だ」

「ああ、すまんそんなこと言わせて」

「別にいいって」

仲のいい友人とたわいもない会話が続く

そして、俺は親父の墓に向かう

4年前、親父は、交通事故で亡くなった

母親は、いない。親父が死んじまってどこかに行方をくらました突然のことだった事を覚えている

「じゃあ、仕事いつてくる」

「いつてらっしゃい」

その日もいつもどおり普段の夫婦の会話だった

「頑張つてな親父」

「あぁ」

息子に返事をする親父  
その会話が最後だった

そして、親父の墓の前

「ようやく、俺もここまで来れたぜ親父、ありがとな」  
そう言いながら花を添えてそこから去る

「けど、すがすがしい青空だな」  
綺麗な青空に感傷に浸る俺

だが、その時間は、即刻打ち碎かれた

キイイッイン！

「マジか！」

不吉な音とともに背後からもの凄いスピードで迫るトラック  
痛みが体を貫いたときには、完全に意識を失った

その時の痛みは、まさに死そのものだった

始まりは、現実 これは、当たり前（後書き）

さあ、がんばっていくぞー！by作者

天国でゲット その名は、月影（前書き）

たぶん不定期投稿になります すいませんm（|）（|）m

天国でゲット その名は、月影

うつろな意識の中、声が聞こえる

高校生くらいの男の声と女の声が聞こえる

「あっちゃー、やっちゃいましたね神様」

「俺逃げたい」

「だめですよ神様」

「ええー」

「文句言わないで下さいよこれでもいいほうなんですよ」

「そうなのか？」

「そうなんです」

光が少し見えるようになってきた

「ねえ、神様この子食べていいですか？」

「どういう意味でだ？」

「あつちの意味ですよ」

「確かに、この顔は、珍しいな」

「ね、カッコいいでしょ」

「だけどダメだ」

「えー！いいじゃないですか」

「ダメだ」

言い張る高校生の声をした男性

「ん？ここはどこだ？」

「でた、王道」

「突っ込んだじゃいけません！」  
バシッ！

ハリセンでたたく中学生くらいのピンク色の布をかぶった神のみぞのエルシィに非常に似た女

性とハリセンでたたかれる fate のランサーに似た男性

「痛ってー」

手で頭を抑える男性

「で、もう一度聞く、ここはどこだ？」  
案の定帰ってきた答えは、

「天国です！（^^）ちなみに私は、天使です」  
つか、もうエルシィそのものだ

「笑顔で言うな！」  
反射的にツツコム男性

この人こそ神様だ

「何で死んだんだ？」そう聞くと

「さあ〜」案の定ボケる神様

「あなたの手違いでしょ！」突っ込む天使  
いつから天国は、漫才の場になったんだ・・・  
「だろうと思っただぜチクシヨ！」

「ハルヒのキンのセリフキター！」  
テンションが上がる神

「で、真面目に聞くと俺に何があつたんだ？」

「ああ、あなたは、トラックに引かれて死んだことになってます」

「なぜに”死んだこと”になってるんだ？」

「実は、面白いくらいの書類ミスであなたの死亡年月日の更新がうまくいかなかったんですよ

。これって珍しいんですよ」

「ふ〜ん、で俺ってどうなるんだ？」

「え〜とこの場合は、」

そういうと何やら分厚い本を読みだす天使

「ああ、他の世界に転生＋色々特典付きになりますね」

「それって、選べたりする？」

「できますよーそして、一覧ですよー」

やけに明るいな

そういうと、分厚い束が俺のところへ落ちてきた

「この中から選ぶのか？」

「そうですね」

そういうと、本の中から目に留まったのを選んだ

「このISの世界に行ってみたいな」

「いいんですか!？」

「いいんです」

間髪いれずに神様が

「ネタキター！」

「うるさい！」

ハリセンでたたく天使

そして、何やらゲートが開き

「まあ特典としては、色々なデータが入ったIS 名称”月影”渡  
しときますね」

「あつ、親切にどうも」

そういうと、手に黒い腕輪が装着され、

「いえいえ、ほら神様も言っつて」

「うん？あぁ、とりあえず生きる生きてりゃなんともなる」

「あぁ、その言葉ありがとう」

「じゃあいつていい！」

そう言われて神様に肩たたかれ

「いつてくる」

そういつて歩き出した

新たなる人生（波乱に）

天国でゲット その名は、月影（後書き）

こんなご時世頑張っていますか !by作者

## 月影基本設定（ネタバレ含む）

お願いします

\*こっから先は、ネタバレを含みます見たい人だけで

\*ネタバレ含む

## 月影基礎設定

### 第1形態 月影

能力

トランザム  
天極

月明宵闇

黄昏（IS間同時連携攻撃システム）（トライアルシステム）

暴走状態（赤き瞳）厄災の鐘

### 第二形態 零

月影基本スペック

基本フレームは、雪羅

雪羅の背中部分にデステイニーウイング装備状態で雪羅の両方のウ

イングスラスター内部にGNドライブ（シグマ）搭載型

荷電粒子砲が4機搭載型でそのほかにガンダム装備も操れる

ストライクフリーダムと同時にマルチロックオンシステムが搭載される

特筆すべきことは、搭載されてるGNドライブはガンダム00で使われてるGNドライブでなくGNドライブ 1機でツインドライブと同等のエネルギーを出すことが出来るのでエネルギーの総量が桁違いだ。長時間のトランザムでも問題は、起こらない。ちなみに二つのGNドライブは、互いにシンクロ率が100%越えているのである。しかし、通常時では、互いのドライブは、リミッターがかかっており総エネルギー量の3分の1に制限しており神谷自身でリミッターをはずすことが出来る。

## 装備一覧

暁 - 零落白夜のパクリ

ディザスター II 機関銃 - ヘリに搭載されてるのをマ改造

グラナスナイパー II GNスナイパーライフル? - ケルデイルガンダムより  
ムより拝借

イグナイトブラスター II GNバズーカ? - セラヴィーガンダムより  
拝借

ブラスタブレード II GNソードV - ダブルオークアンタより拝借  
ソードピッド II GNソードピッド (強化型) x 400 - ダブルオー  
クアンタより拝借

ガリアソード II GNソード? ブラスタ - ダブルオーセブンスソ  
ード/Gより拝借

イグナイトブレード II GNソード? ロング - ダブルオーセブンスソ  
ード/Gより拝借

エクスカリバー II MME - 710 エクスカリバーレーザー対艦刀  
- ソード・インパルスガンダムより拝借

アロンダイトⅡMMI-714 アロンダイト ビームソード・デ  
ステイニーガンダムより拝借  
ツインウルフⅡMA-M21KF 高エネルギービームライフル×  
2-ストライクフリーダムガンダムより拝借  
ミーティアフルストリ-ムⅡMA-X200 ビームソード・ミー  
ティアより拝借

#### 後付装備

#### 攻撃・機動型

ケルベロスドライバーⅡザンライザーのコクピットが無いバージ  
ン-ダブルオーザンライザーより拝借  
肩あたりに装備される

人生は、甘くない(キリッ)

しかし、しょっぱなから最悪な目にあった

「・・・嘘だろおおお！」

絶賛落下中〜

ズドオオオオオン！

「いつて〜ここどこだよ」

そんな風に頭を抱えてると一人のウサギ耳の女性がやってきた

「あなた大丈夫〜」

声のトーン的にふざけてるとしか思えない

「まあ、ここは大丈夫かなと言っておくべきかな」

「あらまあ〜強い子ね〜そついうや、お名前は？」

「カミヤエイイチ神谷影一です」

「へえ〜影一っていうんだ〜」

「はあ、それが何か？」

「見たところ高校生なりたてみたいね」

「はあ、それが何か？」

「ってことは、行けるかな？」

「?????」

「まあちよつときてね」

そういうと、俺は、ウサギ耳の人についていく  
案の定そこには、ISがあった

「触ってみて」

「はあ、」

そういつて、触ると自動的に何かが展開される

「フォーマットセッティング完了！IS code name”月影”起動！」

機械的な声が聞こえたと思ったら  
ガシャン！

雪羅の黒いバージョンが装着された

自動的に装着されそして、何がなんだかわからなくなる俺

「あなた男の子でしょーなんでISに乗れるのか調べてみたいけど、その顔だと何もわからないみたいわねーしょうがないな」  
めんどくさい+興味があるなーと言う目で見たあとなにやらポケットから携帯を取り出しそれをかけた

「もすもしひねもすーはあーい千冬ちゃん」

「HR中になんだったい？」なにやら女の人と話してるみたいだ

「実は男の子が起動できちゃってそつちに今から送るねーちなみ

に入学手続きは、もう済ましてある  
よ〜ん」

「なに？今からだと！」

「今からだよ〜ん、すぐつくからね〜」

「じゃあ、いつてらっしや〜い、あと、私のことは、お姉ちゃんっ  
て呼んでね〜」

そついうと俺の月影を叩いた瞬間

「ルート自動認証フルスロットル稼動！」機械的な声があった  
ギョウウウウン！気づいたときには、空にいて

「ええええええ早ええええ」

とつくに音速超えていた

「どうかしましたか？織斑先生？」

「いや、ちよつとな、それより自己紹介をするぞ」

一夏side

「全員揃ってますねーこれからSHRやりますよー」

山田先生（無理した大人）がみんなに声をかけ

「1年間よろしく願いますねー」

場を何とかしようとするがすごい緊張感に包まれるクラス

そして、俺もとんでもなかった精神的に  
(こりゃ相当きついや・・・)

そして、俺の自己紹介の番が来て

「えー・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」  
儀礼的に頭を下げて上げて・・・

何だこの空気は？このなんともいえない期待してるんですけど何か  
？って言うつ的な空気、流石にこの空気を打開しないとまずいので

「以上です！」

ズガガガ！そしてこける数名の女子

そして、パアッーン！

脳細胞がいくらか死んだ

そこにいたのは、千冬姉さんだった

「まったく、この学園は、馬鹿しかいないのか、それとも、馬鹿が  
集まるように仕向けたのか？」

「キヤー千冬さんよー」

そんな声が色々聞こえる

紹介も終わったことだし

「さて、自己紹介も終わったからこれより、授業をはじめm」ドガア  
アアアン」

クラス中に響き渡る爆発音

「一体なんですか？」いきなりのことわざめきたつクラス

「先生なんかそとに制服を着た男の子がいます」

「それは、本当か？」

「ほんとうですよ」

全員が一斉に外を見るそして俺も

そこには、俺と同じくらいの男の子がいた

突っ込むのは、校庭 これ確定（前書き）

前回のあらすじ

神の壮大なミス というわけにいけることになりました。 よしい  
ってくる。 ハプニング発生 今ここ

突っ込むのは、校庭 これ確定

神谷 side

目の前には、学校の校庭が見えてる

「止まんねええええ！」

ズギユウウウン！

そのまま突っ込み

ドガアアアアン！あまり一面に壮大な砂埃が舞った

「痛い」

ただそれだけだった校庭にあんな速度で突っ込んだら痛いに決まってる

そして、立ち上がる

「そんなうそ、立った！」

「エッ、いったいどんな神経してんのよ」

そんな声が教室の窓の色々なところから聞こえる

そんな中一人の黒い髪の女性が歩いてきた

「まったく、いつからここは隕石が降ってくるようになったんだ」

そういうと、俺を見つめる女性

「まったく、束も面白い奴を連れて来た者だ」

「織斑先生この子どうします？」

「見たところ初心のIS操縦者だな」

「ええ、確かにそうですね」

「やむおえないが少し、相手を頼みます」

「はい」

そういうと、緑色の顔をした人に手をひっぱられ連れてかれる俺

そして、どこかの部屋にはいるや否や

「は〜い、試験やりま〜す」

「試験つて?」

「入学試験ですよ〜」

「筆記試験ですか?」

「いいえ〜そんなことないですよ〜今回特別にISの起動だけでいいですよ〜」

「えらく簡単ですね」

「織斑先生がそれでいいっていいましたからねえ〜」

「はあ」

「というわけで起動させてください〜」

「さっきの衝突でコツはつかんだぜ！月影展開！」

そういうと、さっきの機体が展開される

「おお〜すごいすごい」

かなり驚いてる緑色の髪の先生

「これで入学試験は、クリアですね〜」

「書類とかがつていっなのは？」

「なんか〜織斑先生が書いていたらしいですよ」

あの人なんでもやるんだな・・・

そんなこんなで入学手続きが終わり

「じゃあ、今日は様子見もかねて一日休んでいてくださいね〜」

「あつ、はい、そういや、アリーナって使っていいんですか？」

「別にいいんですけど何かするんですか？」

「試したいことがあるんですけど・・・」

「なら、今日は、アリーナ誰も使わないみたいですから自由に使っていますよ〜ちなみに、明日のHRは、8時30分ですから遅刻しないで下さいね」

「わかりました、遠慮なく使わせてもらいますね」  
「とんとん拍子で話が進み」

そういうと、ドームに歩いていく

そして、ドームについた

「月影展開！」

ガシャン！

「エネルギー稼動効率及び、システムオールクリア」AIがそう言ったら

「さて、とつととやりますか！」

そういうと空に飛び立った

ギューイーン！視界が360度フルに回転する

「武装展開準備良好」

「なんだ？この武装展開ってのは？まさか、ガンダムが使えるわけじゃないだろ」

そういいながら考えるっていつても、使い方とか自然にわかってくる

「武装展開！ディステニーウイング！」

そういうと、背中にディステニーガンダムの翼が装着された

「うお、マジでこの機体チートだな、なら00装備フルで武装展開」  
ジャキイイーン！

「うっおおおヤベエしまつておこっ」

そういうと、慌てて00武装を解除する

「けどこの武装の形態は、どうもな〜」

「カスタムしますか？」ディスプレイが現れ

「ああ、ここをこうして、これをこうして、ビットは、まあスタッフ  
リのと併用でいいだろ、展開名00でいいや」

そっぴいながらカスタム（マ改造＋名前変更）が終わり

「IS展開 月影！」

そっぴいと機体が装着され

基本は、雪羅と変わらない

「武装展開00！」

機体自身は、変わらないが、GNドライブが直接付いたGNバスター  
ソードとこちらも直接植え込まれたGNソード？バスターそれと、  
ソードビットが周りに配置された  
まさに、漆黑＋チートの機体だ

「さて、やってみますか！」

そっぴいと一気に加速して

空を飛んでいる感覚は、気持ちいい

「ビット展開！」

そっぴいとソードビットが一斉に目標に向かって向かう

ピチュン！ピチュン！ストライクフリーダムよりはるかに早い  
「いちかばちかだ、トランザム！」

機体の1部が金色に光だし金色の透過通った粒子が内蔵されたエンジンから放出される。黒と金色のコントラストだ

「シールドがほぼ通常のISの40倍って、まったくチートだぜこの機体」

そして一気に速度が速くなる

「けどこれは、最終の切り札として残しておくか」

そういうと、手に持っていたGNソードV以外の武装をしまう

「これで頑張りますかな」

そういうと、周りを旋回し始め、武器の手ごたえをかみ締める  
何故か周りには、人だかりが出来ていた

「なにあの子？ちょーかつこいいし、あのISの機動性能といいすごくない」

「なにあの子？まじすごいんだけど」

「織斑君とどっちが強いんだろ」

などと声が聞こえた。流石に人に見られるとまずいので  
シューイーン！

展開を解除する

「まあ、今日は帰って寝るか」

そういうと、自分の部屋に戻った

が、気づいたことに部屋は、なかった

どうしようかと迷っているとさっきの緑色の先生がきた、よく見ると山田先生らしい

「あの、俺の部屋ってありますか？」

「ああ、忘れてました、今回、特別にというか、急遽部屋が出来ました」

「はあ」

「で、部屋の鍵渡しときますから自分で探してくださいね」

そういわれると鍵を渡される足早に去っていく先生

部屋番号は、どうやら1234らしい

(つか覚えるの簡単だな)

そういうと、足早に去っていく先生

そして、部屋を探していると案外早く見つかった

「ここか」

そういって部屋を開けると

そこに一つのベッドと一つの机があったまさに個室状態だ

ベッドは、ふかふかだったので案外心地よく眠れた

突っ込むのは、校庭 これ確定（後書き）

感想とかどしどし書いていただけると幸いです。

箇条書きでも結構です。

ほんの些細なことでもいいのでよろしくお願いします。by 作者

「これがテンプレってやつだ！」

なぜ、初心者だった俺が使いこなせるようになったのか

ここからは、精神世界の話になる

周囲を見渡すと夜

星が空に瞬いている

月も同じように瞬いてるが、その月は、かなり大きく今にも地球に衝突するのでは、ないかという大きさだ

さあ〜と音を立てながら周りの木々は、心地よい風で揺れている

「うん？ここは、どこだ？」

さっきまで寝てた布団がなくなってる

「あなたが私のマスター？」やさしい声だ、声を聞くと自分と同じくらいな気がする

「うん、ああそうなるな」

(どうなってるんだ、こりゃ)

どこからかわからないが女の人の声が聞こえる

「なんか弱そうね〜」

「まあ、初めてだからね」

(察せたぜ、ここは、ISの精神世界ってやつか)

「けど、あなたには、やるべきことがあるわ」

「やるべきこと?」

「そのためには、強くならなくちゃいけないの」

「なんでだ?」

「いずれわかるわ、そのために私からプレゼントあげる」

「プレゼント?」

「そうだよ、私のマスターの証ね」

そういうと頭の中に直接何かが叩き込まれる

頭の中に戦場の写真などもある  
目を逸らしたくなるのもあった

「ハアツハアツ・・・」

「大丈夫マスター?」

「かなりきついな」

はきそうなほどの胸焼け、脳内に色々ブチ込まれパンクしそうで非常に痛い

「苦しい?」

「当たり前だろ」

「けど強くなるよ」

「何が？」

少しの沈黙

「まさか、俺の体を改造したのか？」

「そうね〜百戦錬磨の戦士の感覚と同じ風にしてあげたって感じかな？」

「よくわからないな・・・？」

「つまり、チートパワーを手に入れたってことよ」

「つまり、今、俺無敵ってこと？」

「そうね」

「まさかの垂直ジャンプ」

「5メートル」

「矢がいきなり飛んできても」

「余裕で跳ね返せます&よければ」

「月級の隕石がきても」

「IS使えば問題なし」

「現在の視力が」

「ISのハイパーバイザーと同等」

「バイザーつけると」

「反対側が見えます」

「まさかの生身で」

「ISと戦えます」

「パソコン使えば」

「5角形は、掌握できます」

「一人で突っ込んで」

「余裕です」

「本気で殴れば」

「衝撃波は、起きますね」

「刀を振れば」

「空振がおきて硝子が割れます」

「剣道で本気を出したら」

「死人が出ます」

「瞬間跳躍」

「6メートル」

「超能力じゃねえか」

「そこは、気にしない」

「IS関連の知識は？」

「オールコンプ」

「戦闘経験も」

「ざっと30年分は、染み付いてます」

ネタ的なことが終わり

「無敵すぎだろ」

「それほど大変なことになってるのよ」

「なんで？」

「それは、お楽しみってやつです」

「・・・」

その後、暫くしても中々抜け出せない

「綺麗だわね」

「ああ、清々しいくらいに綺麗な月夜だな」  
風が心地いい

「こんな月夜は、初めてだ」

「心地いいでしょ」

「ああ」

「そろそろ、時間ね」

「うん？ああ、そうなのか？」

「そうなのよ」

「なら、じゃあな」

「ええ」

視界が光だし

「いつでもあなたの傍にいるわ」  
という声が聞こえた

最後に見たのは、モデルのような女の人の笑顔だった

朝は、だるい(前書き)

話の都合上短くなってしまいました  
すみませんm(´`m

朝は、だるい

そして一晩過ぎた

窓からは、心地よい朝日が差し込んでいる

「ふあゝ今何時だ？」

時計を見るとそこには、”6:30”と書かれていた

「なんだ、まだこんな時間か朝飯とでもいくか」

ちなみにここで説明しておこう

なんと影一についてだ

神谷影一 15歳

身長 織斑一夏と同じ

容姿（顔と髪型）f e t eの慢心王とよく似ているが髪の色は黒

「あれって、昨日、落ちてきた神谷君だよな」

「そうそう、なんでも国際的なナンバー持ってないらしいよ」

「それってまさかのアンノウン？」

「みたいよ」

「しかし、アレだキツイなこりゃ」

周りには、人だかりならぬ女子ばかり、殆ど全員俺に注目しているらしい

食堂で、とりあえずご飯を食べ終わりHRに向かおうとしたのだが途中で、

「まで、神谷影一」昨日の黒い髪の女の人に呼び止められた

「時間もあるし少しはなしを聞かせてもらっていいか？」

「はい、いいですけど先生」

「なら付いて来い」

そういうと、その先生のあとを追う

「入れ」

そういうと、どこかの教室にはいる

「色々聞かせてもらうがいいな」

「別に答えられる範囲だったら良いんですけど」

「それでいい」

「まず最初に、貴様は男だといえるか」

「いえまずけど何か？」

「まあいい次にどうやって東と知り合った？」

「東さん？誰ですかそれは」

「この女だ」

そういうと一枚の写真を出す

そこに映ってたのは、誰言おうあの姉さんだった

「ああ、この人なら俺が落ちたところを助けてくれましたよ」

「ああ、まったくんでもない奴を送ってきたんだか・・・」  
頭を抱えてる織村先生だった

レッツ 学園生活の始まりだぜ！（前書き）

テストで更新が遅れて申し訳ありません・・・  
ああ、ネタが浮かばない

レッツ 学園生活の始まりだぜ！

キーンコーンカーンコーン

始業のベルが鳴った

「さて、これからHRだ、いくぞ」

「はい」

そういうと、クラスまで歩いた

そういうとクラスの前で立たされ

「ハイ今日は、転校生が来ましたよー」  
ざわめきたつクラス

山田先生がみんなに伝え、朝廊下であった先生（織斑先生）が  
「はいつてこい」冷静な口調で言う

「はい」

そういうと、クラスにはいる

「自己紹介しろ」

「あっ、はい」

そういうと、一呼吸おいて

「どうも、神谷影一です」

大半の生徒の目が光ってるクラス



「よお、神谷って言ったっけ？」

「ああ」

「俺の名前は、織斑一夏だ、まあこの学園俺とお前の二人しかいないからよろしくな」  
少し苦笑いする一夏

「ああ、よろしく、そついや廊下にいるあの人だからは、なんだ？」

「ああ、俺達って有名だから」一夏が説明して

「そついうことね」

(女の園に狼二人か・・・)

「そのうち慣れるよ」

「だな」

「お前も、少しは気にしろよ」

「うっさい」

一蹴する俺

「ははは」

そんな風に笑いあつた二人であつた

俺は、寝てただけなんだがな・・・

そんなこんなでこの日最後の授業が終わった。

放課後

白人の透き通った瞳に金髪で高貴そうな髪の女性が話しかけてきた

「そのあなた、ちょっと？よろしいですか!？」

「・・・」

「聞いてますの?」

怒りそうになるセシリア

「・・・」

「起きて話を聞きなさい!」

「・・・」返事は、ないただの屍のようだ

「まさか!?!」

ガバツ！ 突然起きて

「キャツ!」驚く金髪の女性

「ヤベエ寝てた!」驚いてたように言う俺

そして咄嗟のコメント

そして、”なんだ、こいつ”っていう感じで俺を見るセシリア

そりゃそうだこの学園は、エリートが集まるところで寝るといっ行  
為は、自殺に等しい

「ああ、代表候補生のセシリアか?どうかしたか?」

「あら、私を知っているのね」

「まあな、で用件は、なんだ？」  
「先ほどの話し聞いてました？」  
高慢な口調が少し頭にくる

「ごめん、寝てたから聞いてない」

「率直な意見ですわね」

「まあな」

「実は、クラス対抗戦の出場者を決めるんですけど」  
「で？」

本題にはいる

「あなたに指名がかかったんですけど」

「それについても説明してくれるといいんだけど・・・」

「まあ、”クラス長みたいな奴になれ”ですわ」

「わかりやすい説明ありがとう、で？俺は、どうすればいいんだ？」  
今の状況を聞くと少し困る

「え〜とその、織斑君とあなたでタッグを組んでほしいんですけど」  
「？」

「それで、2対1ってわけか？」

「理解が早いですわね」

「そりやどうも、けど、俺連携が出来ないんだけど」

「困りましたわね〜」

「バトルロイヤルでいいんじゃないのか？」

「それってなんなのですか？」

「簡単に言うと（織斑vsセシリア）vs俺で最後に残った奴でいいんじゃないのか？」

「それはいいですわね」

表情を変えるセシリア

「で、いつやるんだ？」

「来週の月曜日ですわ」

「そりゃまた随分と」

「それと、よく頭叩かれませんでしたね」  
若干頬が赤くなる

「その前に授業中俺いたか？」

「そういわれるとそうですわね」

「まあ、一応伝えとくと気配消してたからね」

「エッ!？」

少し失言してしまった

「驚くのも無理ないさ、まあこれからもよろしく」

そういうと俺は、セシリアと握手した

その後セシリアいわく”礼儀正しい人は、尊敬できますわ”だとさ、俺は、寝てただけなんだが

「**真実は、たまに理不尽である**」

ピルルル

こっちの世界に来たときウサミミ姉さんこと束さんに携帯をもらった  
それがポケットでなっていた  
そして、通話ボタンを押すと

「やつほー生きてるかーい？」

まず、はじめに聞いた言葉がそれだった

「生きてますよー校庭に風穴作りましたけど」

「ありやりやーそりやひどいねー」

「で、何のようっすか？」

「ああー実はさー篝ちゃんって女の子知ってるかーい？」  
(ムスツとしたあの女の人か)

「大体わかりますけど」

「その人が君のお姉ちゃんになりましたー」

「はい？」

「そういうことだからねーバイバ〜イ」  
そういうと携帯を切りやがった

「マジでか・・・」

あまりのことに頭が回らなかった

その後、学園の事務室行つて戸籍調べてもらったら案の定なつてた

やることがないので気配を消して剣道部の練習場に行つて場所を貸してもらつた

そして、いつもどおりの練習を始める

そんな中一人のクラスで見た女性が話しかけてきた

「すまん、試合の相手をしてほしいんだが？」釣り目で特徴的な髪型だ

「うん？ああ、いいが、俺剣道部員じゃないぞ」

「なら何故ここにいる？」

「部長さんに頼んで場所貸してもらつたの」  
真摯な対応で借りた

「ああ、まあいいがよろしく頼むぞ」

「本気で頼むぞ」

「うん？ああ」

その後、剣道部の観客がある中試合が始まつたんだがこれがまた大変なことになつた

「はじめっ」

ダツ！体が一気に熱くなり、一気に箒の方に駆け出す  
(チートパワー発動)

箒からの目では、相手が動いたと脳が理解した瞬間

「終了！」

電子審判がそれを告げた

刹那のごとくだった

「何があったの？」

「エッ、なに？」

そんな声が周りから聞こえる

そして、剣道らしく礼をする

そして、借りた部長に礼をして帰って着替えて食堂に行くこととした。

華麗なるG (4通りの意味が) (前書き)

とりあえず 更新遅れてすみませんでした ! m ) ( m

## 華麗なるG（4通りの意味が）

食堂に行く途中に織斑とさつき戦った奴（篝）と会った

「よお、織斑そして同士よ」

「ああ、神谷、お前も飯か？」

「ああ、一緒に行こうぜ！」

一緒に食堂まで歩いていると

「一夏！そして、貴様は！」さつき戦った奴が話しかけてきた

「篝？どうかしたか？」

「さつきのやつだ」顔を赤くして言ってる

「神谷？何かしたのか？」

俺は、何もしてないつもりだ

「うん？ああ、剣道で試合申し込まれて勝っただけだが」

「それだけ？」

「そりだけ」答えを返す俺

「まあいいや飯行こうぜ飯」

そんなこんなで食堂に行った

俺は、ラーメンが好きだからラーメンを頼んだ

「そっぴや、神谷つてどこ中出身なんだよ？」

（転生者ですとは、いえないしな）

「あーおっさんに言うなっついていわれてる」

「おっさんてだれだよ」

「察しろ」

「へーい」

食事の中

「ひ、ひとつ聞いていいか？」 箒が赤面しながら聞いてきた  
赤面して聞かれるとこっちとしても困るものだ

「なんだい？ 箒さん」

「あの技教えてくれ」

「今は、無理ですね、けど、原理だけは、言葉で教えてあげます（  
口が滑ってもチートってことは、言えないからな）」

「頼む」

「あの技は、反射の原理を利用して一気に血管の流れを一時的に強  
化してそれに伴って体を異常なまでに動かす技です、副作用として、  
極度の高熱が出ます。以上」

（俗に言うチートってやつだ）

「そんなこと聞いたことないぞ」

「世の中は、広いんです」 篠ノ之を諭す俺

「一夏は、わかった？」

そう聞くと、一夏は満面の笑みで

「うん、わかんない」

「笑顔で言うな！」「ツッコム俺と箒

「でさあ、箒姉ちゃん」

「っ！」「いきなりなこと驚く箒

「おいおい、神谷どういうことだよ？」「ジョークでも言ってるのか  
という顔をする一夏

「簡単さ、ほらウサ耳東さんに”お姉ちゃんとよんでね”っていわ  
れてさ」

「ああ〜ってまさか、戸籍上で！？」

「そのまさかさ、何故かわからんが戸籍上、箒が俺の姉さんに当た  
るんだよ」

「っ！」「っ！」「っ！」

驚きすぎて声が出ない二人

「おい、神谷！」

「なんだい？」

「わ、私のことは、筭でいいぞ、そ、その年齢一緒だし」

「なんで？」

「流石にこれ以上面倒なこと増えるのは、御免だ」

「ああ」

妙に納得した俺だった

そんなこんなで食事が終わり

廊下で慌てている織村先生に声をかけられた

「おい、神谷」

「はあ、織村先生どうかしましたか？」

「仕事だ」

「はい？」

「まあこい」

そういうと机がたくさん置かれてるところに連れ込まれた

ちなみに、怪しい部屋だ。如何にもな部屋だ、そしてなにやら電子機器がたくさん置いてある。

つまり3拍子揃ってる部屋だった。

「これから貴様には、ドイツに向かってもらおう」

「なんで？」

「学園命令だ」

あまりの大きさに若干驚く

「へえ〜で、そのわけは？」

「2時間前、ドイツで開発されていた試作型のGシリーズのIS<sup>ジェネラル</sup>”正義の騎士”<sup>ジャスティス</sup>が暴走した」

「ドイツの特殊部隊は、何やってるんですか？」

「いま、応戦中だ」

いつにもなく織村先生の顔色が悪い

「ふう〜ん、そいつらを撃破してこいと」

「そういうことだ」

「わかりました」

「たのむぞ、神谷」

「ハイハイ」

そういうと、織村先生に言われた出撃ポイントに行く

「月影展開！」

ガシユウウウン！

「さて、いっちょやりますか」

シユオオオオンン！エネルギー駆動炉が動いてる音がする

肩の部分からエネルギーの粒子が漏れ出す

「エネルギー良好だな」

ディスプレイには、「エネルギー安定領域」と表示されてる

シユンツ！一気に空に上がり

バシユ！シユイイイイン！一気にドイツを目指した

ほんの数分でドイツ上空に着いた

眼下には、一機のISが3機のISを圧倒してる

「あれってジャスティスガンダムに非常に似てるんだが」

そう戦ってるのは、ジャスティスガンダムが人になつた感じで擬人化といっても過言ではないくらいだ

「ふうくん、そんなところか」

銀髪の女の人と黒い髪の人がISに乗って戦ってるどちらともダメ  
ージが激しい

「相手が相手だしツインウルフでいいな」

そういうと両手にビームライフルを装備する

「さて、助けに行きますか」

そういうとジャスティスめがけて一気に向かった

???side

「まさか、これほどだとは、どうりで知らされてないわけだ」

「隊長！」

「わかってる、私がひきつける」

「はい」

そういうと自分にひきつける

だが、予想外な動きをした

ついて来るどころかいきなり大型粒子砲を撃ってきたのである

「クッ！」

エネルギーの消耗が激しく墜落しそうになったその時

「やっぱり、急いでこれでよかったぜ」

黒髪と黒機体のISがそこにいた

神谷side

ジャスティスに向かつてる途中

なにやらジャスティスの動きがおかしい

「いや〜な予感がするぜ」

そういうと一気に加速をつける

「やっぱりだ！あぶねえ！」  
いきなりジャステイスが大型粒子砲を撃った

「まにあええええ！」  
シューイーン！ガスッン！

背中に衝撃が走る

間一髪間に合った墜落しそうだった、女の子は、無事みたいだ  
「き、さまは・・・」

ガクッ

「おい、おい、」

ハイパーセンサーのディスプレイには気絶と書かれている

「まあ、少し休んでろ、君の借りは、返してきてあげるから  
そういうと空に上がる

「おい、貴様誰だ！」

ISツヴァイクに乗った女性が話しかけてきた

「神谷影一だ」

「貴様、何しに来た？」

「助けに来た」

「証拠は？」

何処の警察だよ、おい、こういう場合、敵味方関係ないだろ

「織斑先生からの要請だ」

「っ！教官の」

「そつちじゃそう呼ばれてたんだな」

「そうか、教官が」

「すまんが、そこにいる彼女を安全な場所に運んでやってくれそれ  
までに片付けておく」

「わかった、頼むぞ」

そういうとレーゲンの操縦者である彼女を運んでいく

「さて、ショータイムだ！この偽善野郎！」

カッコよく武器を構える

「危険度ランクSに認定、これより攻撃を開始する！」  
無慈悲な機会音が聞こえ

「かかってこいや！」

V Sガンダムが始まった

シューイイン！

シューイイン！

二つとも音速を超えた戦いをしてる

シューイン！ピチュン！ピチュン！ピチュン！ピチュン！

ツインウルフで攻める俺と

シューイン！サシュン！ズガガガガ！

実弾連射で攻めてくるジャスティス

ジャキン！ビイイイン！

シュオオン！一気にサーベルをもって攻めてくるジャスティス

「っ！サーベルだと！」

ピチュピチュピチュピチュン！

ツインウルフを連射するが全部弾かれる

「弾かれた！そんな！ならこれだ！」

ザシュウン！イグナイトブレードを呼び出す

「ハアアア！」

ガキッ！音速でサーベルとブレードがぶつかり合う

「まだまだあ！」

ガキッ！ガキッ！ズガガガ！

一気に距離が離れたところで機関銃を使ってくるジャスティス  
「そこだあ！」

一気に懐に入って斬りつける  
ザシューウウン！

見事にあたった

ジャステイスのビームカノンと駆動炉の管を叩き斬った

その途端

ギョオオオオン！赤いエネルギーがジャステイスを包み込む

「・・・セカンドシフト二次移行！マジかよ！」

そこにいたのは、機体が赤黒く光ってるインフィニットジャステイス（黒色バージョン）だった

「っ！」

シューインツ！

ありえない速度で一気に間合いを詰めてくるジャステイス

「この機動力、まさかトランザム！」

段違いなその速度は、トランザムを使ったとしか考えられない  
ピピピツ！織村先生からスペックデータが送られてきた

そこに書いてあった内容に俺は、目を疑った

「そんな、擬似GNドライブ搭載型だと」

ジャステイスが通ったところには赤い粒子があった

「反則だろ・・・」

シューインシューイイイン！必死に攻撃を避けてる

ピコーツン！

『天極を使うのよ』精神世界で聞いたあの女の人の声でした。

「よしっ！出力上昇！天極発動！」

キユイイイン！一気に機体の速さが早くなる

「ハアアア！これからが本番だあああ！」

ズガガガ！威力が強化された機関銃を撃ってくるジャスティス  
ガッツツ！

シールドで相殺する

「ハアア！」

ガッツン！

サーベルとブレードがぶつかり合い

サシユイイイン！グイングイン！

サーベルが一気に蛇腹剣になった

「っ！」

グインガスガスガス！

鞭のような攻撃を捌ききる俺

ズガガガガ！それと同時に機関銃も撃ってくる

「まだまだあ！」

俺も負けては、いられない

「荷電粒子砲！全砲門発射！」

ズドオオオン！ジャスティスに向けて粒子砲を放つ

ジャスティスが回避行動をとる その瞬間！

「素晴らしいiiiiiiii！」

ザシユウウン！

装甲を貫く感覚がした

「ハアツハアツ、終わったか」

目の前には、ジャスティスの残骸がある

「終わったみたいだな」織村先生が通信してきた

「はい、完了しました」

「次は、ロシアだ」

「マジですか？」

（連続とか、ないわ〜）

「マジだ」

「で、相手は、なんですか」

「SシリーズIS、アヴァランチェ雪崩だ」

(アヴァランチェっておいおい、面倒ごとは、御免だぜ)

「わかりました」

「場所の座標を送っておく」

「どうも」

「シューイン！」

「座標軸確認、目標第三ロシア研究所」

ものすごい速さで俺は、そこに向い始めた

## V Sガンダム 雪崩

ボスッ！シュイイイン！ロシアに向けて一気に加速した

「まったく、どこのどいつだよこんなにあのシリーズがあるなんて聞いたことねエゼ」

（なんだ、このモヤモヤは、まったく面倒なことになりそうだ）

「じゃあねえ、出力上昇低光速モードだ！」

キユイイイン！一気に出力が上がり

バシュウウン！光に限りなく近い速度でロシアに向かった

「まったく、この状況なんだよ！」

周りには、瓦礫しかない

（嫌な予感もするし、先、急ぐか）

「あんまり、面どい事起こらないでくれよ」

そついうと一気に加速する俺であった

????side

ガキッンガキッン！

槍でアヴァランチエの攻撃を捌いてるが、現状劣勢だ

「まったく、何てもん開発してたのかしらね」

ガキッ！ズガガガ！

「っ！」

クルクルクル！槍の回転で弾丸を回避し

シュウイイン！

一気に空に駆け上がる

「ハッアアア！」

ザシュザシュ！一気に槍でついていく、だが

「フレーム展開解除・高機動状態に移行」機械音が鳴り響く  
ガシュガシュ！

重苦しいそんな状態から一気にすばやいフォームになった  
シュイン！一気に迫るアヴァランチエ

「っ！」

それを瞬時に理解し間合いを開ける

ガキツガキツガキツ！

アヴァランチエの無慈悲な攻撃がじわじわとシールドエネルギーを  
削ってる

そして、一瞬だけ懐が開いたその瞬間をねらって槍で突こうとした  
その時！

「ウソツ！」

機械とは、思えない速さで一気に体勢を変え迫る

相手は、大型ブレードこっちは、槍だ

「くっ、不覚！」あまりに早い攻撃で目を瞑ってしまっ

そしてまさに振り下ろされ殺されようとしたその時！

ガキツイン！

「ほんとっ、俺のCANは、よく当たるから怖いぜ」

そこには、常識では、ありえないISのコアナンバー”Unknow  
n”

その存在は、噂で聞いただけしかなかったIS月影がいた

神谷side

「ありゃ、アヴァランチエじゃねえエクシアじゃねえか！」

イグニッションスーパードライブ

そう思うと瞬時超加速で一気にそいつまで迫る

そして水のようなISで戦ってる彼女に一撃入れようとしてる

「間に合ってくれ！」

その一心で刀を構える

そしてまさに当たろうとした瞬間

ガキッイン！刀とブレードがぶつかる音がした

「ほんとっ、俺のカンは、よく当たるから怖いぜ」

間一髪で助けられた

「大丈夫か？」

「え、ええ」

「離れたところで休んでいてくれ」

「あっ、うん」

そういうと安堵の息を漏らし、一気に離脱する水色のISの操縦者

「さて、とつとと終わらせて帰るとしますか」

そういうと目を瞑って刀を構える

「暁、頼むぞ」

目を瞑ってそういうと刀の波状が放出状態から日本刀のような美しいフォルムになる

「目標を変更、危険度レベルS、出力リミッター解除圧縮エネルギー  
ー完全開放開始、敵撃墜のためこれより対処する」

機械の無慈悲な音がし

シューイイン！エクシアの機体の色が赤色に染まる

それと同時にエクシアの武器もエネルギーで赤いブレードに変化して  
てる

まさにトランザム状態だ

そして

バシユイイイン！一気にエクシアが空に上がった

「待ちやがれ！」

バシユン！俺もそれを追いかける

「ハアアア！」

ガキツンガキツンガキツ！

ブレードと刀が混じり

シユウン！

ズガガガガ！エネルギーライフルをめちやくちや撃ってくる

「っ！反則だろ」

瞬間超加速でライフルの弾丸を回避する

もはやもうこれは、実験機どころの話じゃない  
まさに化け物だ

「こりゃ一撃で決めるしかないな！天極発動！」  
機体の色が一気に赤に染まる

だが、相手は、”化け物”だ

シユン！ズガンズガン！シユン！

ヒットアンドアウェイで一気に攻め立てる

だが、所詮は、機械、全てパターン化されてるなら隙が出来るように誘導すればいいだけで

シユン！

奇怪な動きをしてやればいいだけだ

「だろうと思っただぜ、演算に時間かけてやがる」

わずかな隙が一瞬できて

「やっぱりな！そこだ！」

サシユウウウン！

ズガン！

一瞬にして装甲を切り裂き爆発した

「ふいふまったくてこづらせやがって」

目の前の残骸に目をやる

「しっかし、この世界も面白いもんだぜまさかガンダムがいるなんてな」

そういうとさっきの操縦者のことに気づく

「おっとっと、忘れてたぜ」

そういうとそこいら辺で休んでいた彼女の元に向かう

「大丈夫か？」

「ええ・・・」

「なんか浮かない顔をしてるな？本当に大丈夫か？」

「平気よ、まさかアレを倒しちゃうなんてね」

神妙な面持ちの操縦者

「うん？ああ、結構キツかったですよ」

「へえ」

（まあ、正直かなりてこずらされたな）

「あなた、どういったこととどこにいたの？」

「ああ、俺っすか、俺はそうだな・・・たまたま通りかかったとでもいいでしょうかな」

仕事なんだけどね

「ふん、それにしても、えらく強いわね」

「そりゃどうも」

「これから暇？」

「いや、門限が近いもんでね」

「へえ」

「じゃあ、これにて失礼しますわ」

一気に空まで上がる

「じゃあね・・・絶対・・・まえ・あげるわ」

そういうと一気に空に上がり学園にむかった。最後のほう彼女がな  
んて言ってたかは、知ることなかった

シューイーン！

夜空を今、オート（星空見ながら）で飛行している

「綺麗だなあ、」

空気が透き通っていてかなり綺麗だ

「さて、こんなことしていると飯に食いそびれそうだな」そういうと  
一気に加速して学園に向かった

そしてIS学園の正面入り口上空

「着いたな」

そういうと空中で展開を解除し、制服になり  
スタツ！

地面に降りる

「神谷」

前には、俺の担任の織村先生がいた

「よくやってくれた、ありがとう」

「あっ、はい」

あまりのことに驚く俺

その後、俺の部屋に向かい床についた

## 一夏VSセシリア

その翌朝

授業は、到底・・・なものであり うん諦めよう!と思った今日この頃

ぶっっちゃけたことというと、神様のおかげで教科書の端から端まで全て入っていた。だから、瞬時に再生することも出来る  
そして放課後

「おお〜い神谷」必死に俺を起こそうとする一夏

「・・・」うつ伏せになつたまま寝る俺

そんな中

「どけ、織斑!それとお前は、席に着け」

バシンツ!叩かれる音が聞こえる

俺のところに近づいてきたのが聞こえ

「お前は、少しは、椅子から離れたらどうだ!」という織斑先生の声と共に

バシィィン!

「・・・キユウウウ」と唸り声を立てて気絶する俺に山田先生が

「織斑先生やりすぎです・・・」と怯えながら言っ

「確かにやりすぎたという気持ちもあるが反省は、してない」

(少しは、反省しろよ)

と心の中で思う一夏であった

時間は、進み月曜日の放課後

今日は、セシリアと俺と一夏でのバトルロワイヤルの日だ

一夏のは、相変わらず初期状態の白式だ、一方セシリアは、代表候補だけあった専用機のブルーティーズだ、俺のは、専用の月影

そして、ここはアリーナ

「さあ、殺し合いを始めるぞ」そんなことを呟くと

「物騒なことというな神谷」突っ込む一夏と

「まったく物騒ですわ」ドン引きするセシリア  
そんな中アナウンスで

「アリーナの時間は、限られてる、とつとはじめる馬鹿者」

「へいへい、馬鹿者は、馬鹿者らしく始めますよ」

「ということ、まあ、まずは、セシリアと一夏で戦え、その後2人vs俺で戦え」

「はあ？どういうことだよ。まあいいか、全力で行くぜセシリア」

「かかってくることでしょ」

そうすると戦闘が始まり

「さあ、踊りなさい！わたくし、セシリア・オルコットとブルーティーズの奏でるワルツで！」

ズガガガガ！

容赦ない弾雨のごとき射撃が一夏に襲い掛かる

シユイン！シユイン！

それを避けたとしても正確な射撃が一夏に降り注ぐ

「装備は、装備は？」なにやら戸惑ってる姿が見える

ここまでするのか？と思いながら二人の戦闘を見る

「ええいままよ！」一夏の手に近接のブレードが装着された

「中距離の私に近距離で挑むのは、いいことですよ！」

「こんなところで引けるかよ！」  
2人の激闘が始まった

「ああ、全部展開の自動で一撃かな」  
呟きながらただ観戦してる俺であった

「 27分、よく持ちましたわね。私のブルーティアーズの前によく持ちましたわけど、もうファイナーです」  
残量67、一夏の武器は、かろうじて使えるぐらいだ

「まあ、そうなるだろうな」  
どうしても人間が反応するには、コンマ単位で遅れる

俺が遠くを見たとき試合は、とっくに変わっていた

「これで、終わりだあああああ！」

「えっ！そんな、この私が!？」  
雪片を握った一夏がブルーティアーズの猛攻をよけきり、ブルーティアーズの懐に入っていた

ドガアアアアン！

「おっ、終わったみたいだな」呟きながら2人を戦闘を見ていた今の状況的かというとようやく専用機体になった機体がブルーティアーズを攻めてる

「雪片あああ！」

ザシユウウン！  
ビィィィン！

空気を切り裂く音と共に試合が終わり

「勝者 セシリア・オルコット」

そんなアナウンスが聞こえる中

「さーて、出番かな」

アリーナに漆黒という名がふさわしい機体が現れた

相手を挑発して叩き落すのが俺の流儀（キリッ）

「まったく、忘れてたとは言わせないぜ、一夏、セシリア」

シユイイン！ジャキイイン！俺は、ISを展開した  
その圧倒的な姿にクラスの女子がざわめきたつ

「さて、2対1のマッチか楽しみだ」

はたから見るとハンデに見えるが実力差的に今の二人でも俺に勝つ  
ことはない

「まったく、何で俺がこんなことやんなきゃならないんだよ」

（マジ、さっきの生ぬるい試合で眠いんだけど）

「たく、たかがIS乗れただけで図に乗るなよ」

俺は、わざと相手を本気にするためにこう告げる

「相手は、まずい料理の国の使い手と古臭い伝統に縛られた国か」

ブチッ！・・・二人の瞳がハイライトになり

「神谷、舐めてるだろ」

「あら、一夏さんと同感ですわ」

一夏とセシリアの意見が一致する

「セシリア、いったんあの事は、休戦だ」

「ええ、私もそう思ったところですよ」

こりゃ好都合な状況になった

「サポート頼めるか？」

「誰だと思ってるのです？私一人でも十分ですわ」

近接型の一夏と遠距離に特化したブルーティアーズ、2人がくむと中距離は、空くもののほぼ完璧になる

「そりゃありがたいな、けどやらなきゃいけないときがあるんだよ」

「そうですわね」

完全に激怒状態の2人

そして声が重なる

「「とりあえず一発殴らせろ（ですわ）」」

そう言ってる間に二人のエネルギーを回復させる

「やれるもんならやってみろ」

そういうと月影のブラスターを一気に開放する

「いいですわ、一夏さん近距離で詰めてください私が後ろから」

「OKたのむぜ、セシリア！」

（おっ、仲良くなったみたいだな）

「いきますわよ！ピッド！」

セシリアがピッドを展開し、一夏がもちろん近接でかなりふたりの相性は、良い、だが俺も何も対策をしていないわけではなく

「まずは、織斑から潰すか」

そういうと、セシリアを攪乱するために大量のソードピッドを放つ

「こんな数を操る人って初めてですわ」数にして・・・数えるの面倒だから辞めた

予想どおり攪乱されるセシリア

「まあ、一夏あれだ 負けてくれ」

その言葉と共に俺は、一気に詰め寄って

ザシユウウウン！

暁の切り裂く音がする

「はい、終わり〜」

ズガアアアン！シールドエネルギーを根こそぎ奪い取り一夏を地面に叩きつけた

「次は、セシリアか」

そういうとブラスターピットに意識を集中させる

それに伴い機動性も上がる

「そんな動きが早いですわ！」

ピキュンピキュン！ありとあらゆるところからレーザー弾丸が掃射される

それがまったく当たらないわけでもなく

「・・・出鱈目もここまでくると何も言えないな・・・」

リアルタイムモニターに映し出された一方的なワンサイドゲームに、織斑先生は呆れたように呟いた。いや、ワンサイドゲームと呼ぶには、セシリアはよく神谷に食らい付いている。超高速で動く神谷をビットで追いかけて、移動先を予想してスターライトmk?を撃つ。その射撃は正確だが、神谷には当たるところか掠りさえしない。セシリアは神谷に善戦するも、完全に振り回されていた。

そして、ころあいかと思い

「まあこれで終わりかな」  
ガシユン！

そういうと、右腕にディザスターを装備して

「ファイヤー！」

ズガガガガ！

俺が、そういうとディザスターの先端のところ回りだし一斉にセシリアに向けて弾丸が放たれた

「エッ、そんな！」

反応したときにはとき遅く

ビッー！勝者 神谷影一

無慈悲にもアナウンスが響き渡った

振り返ってみるともはやもう殲滅戦に等しかった。つか、殲滅戦そのものだった

「痛ってーやりすぎだろ神谷」

「すまんすまん、それより大丈夫か？」

上空から一気に降りて二人の安否を確認する俺

「ああ、なんとかな」

「そりゃよかった、セシリアは、どうだ？」

「まったく世界ってものは、広いんですわね」セシリアは、どうやら無事のようにだ

「その通りさ」諭すようにいう俺

「その言葉、高校生が言うもんじゃないと思うぜ神谷」

「そうか？」

「そうなんだ」

「けど、これでお前がクラス代表だな」

「そりゃここで負けましたっていつてもたいていの奴が信じないだろ」

「だろうな」

周りには、俺達に興味がある女子達が今の試合を唾然とした表情で見ている

「神谷さん、ひとつ聞いていいですか？」

「何だセシリア？」

「一夏さんをきつたときに使ったその刀の名前教えてもらえませんか？」

「ああ、この刀か」

そういうと、一極集中型で刀を展開する

「この刀の名前は”暁”だ、ちなみに効果は、相手のシールドエネルギーを奪いそれを増幅しそれを威力とする効果がある」

「そういうのをなんていうか知ってるか？」一夏が会話に混ぜてきて

「????」わざと知らないふりをする俺

「チートっていうんだぞ」教官風に言う一夏

「確かにそういわれるとそうだな」ツッコム俺だった

「さっきの最初の言葉あれ、本当か？」

「ああ、あれか、おまえらを仲良くするために仕組んだんだよ」

「仕込みなのか？」

「そゆこと」

俺はとりあえず和解した

気絶させれば問題ない！

一夏とセシリアとの試合も終わり自分のピットに戻り、武器のメンテナンスをしていると

「ムダにでかいな」

大きさに、そこいら辺の学校の校庭一つ分はある

「これだけあると色々置きそうだな」

そんな風につぶやきながら作業をしていると

突然、視界が暗くなった

「だ〜れだ」

「・・・」突然のことにあわてる俺

「はい、時間切れ〜」

目を開けるとそこには、扇子を持った不思議な女性がいた

リボンの色ですぐに2年生だとわかり、水色の髪と赤い瞳をした先輩がそこにいた

「どうかしましたか？先輩？」

「ちよつと付き合ってもらえる？」

「まあ別にいいですけど」

そういうと、その見知らぬ女の人と歩き出す

2人つきりで歩いていると女の人が話を切り出した

「さっきの試合、君すごかったねえ」

「そりやどうも、先輩」

「そういや、君名前なんていうんだい？」

「神谷影一ですけど」さすがに、初めてなので内心少しどきどきしていた

「ふうん〜」

どこに向かっているのかわからないけどまあ、これはこれで楽しかった

そんな中

「会長！」

バツ！突如現れ、会長に襲いかかる剣道部

「ああ、あ、女の子が女の子に手を出す展開ね、まあ、お兄さんちよいと許せないかな」

シユタツ！ガスツ！

突如現れた剣道部の女の人が攻撃してきたから近くであった棒棒で背後に回りこんで気絶させた

「まあ、うらみっこなして事でさ」

バタツ！

剣道部が気絶し地面に倒れる

「会長覚悟！」瞬時に現れる部活動の生徒

「あらあら、まったくめんどろな事になったわね」

「そうですね会長」

じりじりと本物の矢を俺や会長に向けている弓道部、その後ろには柔道部もいた

けど、ISがあってもなくても戦闘力は俺のほうが高い。なぜなら神様からもらった能力により身体能力その他もろもろが格段に上昇しているからである

「君ならどうするこの事態？」

「まあ、気絶させますね」

「じゃあ、お互い健闘を祈ろうかな？」

「いや、肩慣らしにちよいと、いいっすかな？」

「へえ、やる気じゃない」

「それはどうも」

そういつと

「目標は会長！撃てええ！」

ピシュシュシュシュン！会長めがけて矢が放たれた

「まあ、弾道が甘いところなるんだよね」

そういつと

シュイン！

スカカカカカ！

全ての矢が影一の一振りによつて叩き落とされた

「・・・叩き・・・おとされた」

今の行動に驚く弓道部部长、だが同時にあきらめてなく

「肉弾戦よ！柔道部行けええ！」

ワアアアア！柔道部が勇猛果敢に攻めてくる

「わからないひとだな」

俺がそういつと

シュタツ！

俺が柔道部の横を通過した時には

バタバタバタバタ！柔道部の選手たちがすべて倒れていた

「まあ、こんなところかな？」

そついいながらも、にこやかに主犯である弓道部に目をやると

「っ！撤退イイ！」

思いつきり逃げて？行った

「いや〜強いね〜神谷君」

「それはどうも生徒会長」

「ええ〜それだけ〜？」

「それだけです」

お互い気づいてる二人、そういうと生徒会長は  
ダキッ〜！俺の首周りに手を回し

「つつかまえた〜」

「・・・つかまった？」

そういうと耳元で

「ひっさしぶり〜神谷く〜ん」

「お久しぶりです、楯無会長」

そう、生徒会長こそロシアで助けた女の子だった

生徒会長は何でもやっついていいというわけではない！

それから

「あのさ〜お礼も兼ねて生徒会室に来てよ？暇人でしょってか暇人だよ？暇人君」

「確定形っすねってことはもう確定っすか？」

「そういうことね〜」「ニヤニヤと笑う会長

「というわけで連行だよ」

「っ!?!えっ!いつ逮捕されたの罪状は？」

「えっ?いやこの惨状だけど？」

目をやるとくたばっている生徒たち

「ちよっ、これ正当防衛っしょ」

「いや〜みすごせないんだよ〜」

そういうと俺の手をつないで

「逝くんだよ〜」

「字が違アアう!」

そんな風に突っ込みながら連れて行かれた

そんなこんなで生徒会室

「ただいま〜」堂々とドアを開けて入る会長

「おかえりなさい、会長」

「わあ〜カミヤンだ〜」不思議なことに同じクラスのほほんさんがいた

(あれ、どっかの不幸少年と一緒にされた気がする)

入ると俺はソファに座らされ（立ってたら座るように言われた）

「でさあ〜神谷君」

「なんつすか会長？」

「呼び方なただけどさあ〜」

「はい？」

「楯ちゃん（？）でいいわよ」

ブホオオオオオオ！ 壮大に吹いた

「なんでそんなに吹くの？」

「そんなレベルからですよ！」

「冗談だよ、冗談」

少しどころか俺の反応をみて笑っている楯無さん

小悪魔だこの人は

それにしても色々な仕草を見るに会長はいかにも風格高い家柄の人みたいだ

奥からのほほんさんのお姉さん？に当たる人がやってきた

「どうも、お茶です」

にこやかに笑うその女性は、俺の前に一杯のお茶を置いてくれた

「ありがとうございます」

そういうと俺は軽めに挨拶した後お茶をもらった

ズズズズズ、お茶をすする俺

「う〜ん、この玉露の感じが美味しい」

渋い言葉を言う俺

「わかります？」

「ええ」

質問されたので答えをかえした。お茶をのんだその瞬間お茶の本場京都に飛ばされた感覚がした

そういうと、会長が

「ええ〜と、今お茶出してくれたのが布仏 虚ちゃんなんだよ、ち

なみに本音ちゃんのお姉さんね、ありがとう虚ちゃん」

そういうとお茶出してくれた布仏先輩にこやかに笑う先輩であった

「あっ、どうも」

俺は思わず頭を下げる

「こちらこそどうも」

優しく挨拶してくれる先輩であった

そういうと、なにやら俺の事が書かれた書類やディスプレイを開いて俺vsセシリア&一夏の戦闘を見てる

「あのさ〜かみちゃん」

「（呼び方変わった・・・ちゃんずけつすか）なんつすか会長？」

「あのさ〜この戦い見るとさP.I.C、バッシュ・イナーシャル・キャンセラーマニユアル？」

「ああ〜それがよくわからないつすよ、俺も乗ったばかりなんで、なんていうか、感覚で動かしてるんですよね〜」

「・・・それほんと？」

衝撃の事実を受けたみたいに驚いている楯無先輩

「あのさぁ・・・嘘ついてないよね？」

「嘘なんてつくわけないじゃないっすか」

笑顔で俺が言う

「織村先生が言うのも無理がないわ・・・」

なにか思いつめたように言う先輩

「いまのところね、マニュアル操作なのは、私と君ぐらいなんだよね〜」

「へえ〜勉強になります」

（あんなに使いやすいのにな）

「やっぱりかみちゃんとは、気が合いそうだ」

「そりゃ嬉しいですね」

「今度、君のISと戦ってみたいな」

「アリーナ使えるんですか？勝手に？」

「生徒会長権限で使えるんだよ」

「（おいおい）」

「そんなことで使っていていいんですか」

「会長ですから」

「（威張っていうことじゃねえ）」

そして、なんか会長が怪しい書類を書いていたのは、言つまでもないことであらうと俺の名前が見えた

「そっぴや、会長何かいてるんですか？」

俺が質問すると

「というわけで、一緒の部屋ね」

いきなりそんなも言われたもんだから

「ハイ？」

俺の思考能力もあまりのことにストップしていた

「だから、今日からお姉さんと一緒の部屋だよ」

「なんでですか？」一応冷静に聞くと

「さつきも出てきた、生徒会長権限だよ」

「（まさに、これこそ職権乱用だ）」

「で、俺の今の部屋はどうなるんだ？」

「（あのただっ広いベットどうするんだが）」

「ん？あああの部屋元々2人部屋だったんだよ」

「（通りでくそ広いなあ〜と思ったわけだぜチキシヨ）」

そんなこんなで談話が続き

「さて、行くところに行きますか？」

「まあ、場所わかってるんであえて聞きませんよ」

「聞き分けの良い子は、お姉さん好きだよ」

「そりゃどうも」

ガラガラガラ

そついつと生徒会室をでた

## 楯無会長のターン！

廊下を歩いていくとそこは、学園長室だった

「失礼します」

重厚なドアを開けて学園長室にはいる俺と楯無先輩

「ああ、更識君、それに神谷君」

入ってごうせいな机に座っていた男性こそこの学園を管理している人だ、普段は用務員の仕事をしているその人の名は、”轡木十蔵”だ。顔には、歳相応のしわが刻まれている

「学園長用件とはなんですか？」

「実は、最悪の事態が起ころうとしているそれをとめて欲しい」

THE厨二的展開

「なんでしよう」真摯な対応に改めて驚かされる俺

「亡国企業が動きを見せ始めた。そこで2人には、組んでもらう」とにした、そして、神谷君には、特別権限を与える」

「もしかして、そのためにわざとあの部屋を」楯無先輩が聞いて

「そうですよ」ゆったりとした声で言う学園長

あの部屋「1234号室」たぶん今は、ベットが二つになってる

「特別権限のことなんだが、私が緊急事態だと判断したときは、学園内でもISの展開を認めよう、しかし、月影の第二形態は、基本的に使うことを禁止する」

「それで、俺は何をすればいいんですか？」

「授業時でも、動いてもらうぞ」

「それは、承知の上です。ですが織斑先生には、なんと言えばよろ

しいのでしょうか？」

「ああ、織斑君には私が言っておこう」

「それは、ありがとうございます」

「ああ、多分更識君が言ったかと思うが、部屋一緒ということだね  
「ハイ」

（なんか部屋一緒って言うところだけ強調された気がする）

「というわけで以上だ、ちなみに私は、また掃除でも始めるかね  
そういうと、用務員服を着る学園長

（この人は、いい人だ）

「失礼しました」

部屋を出る俺ら

「さーて、頼みますよかみちゃん」

（かみちゃんって・・・）

「了解しました楯無先輩」

時間は、6時くらいを過ぎていたそろそろ腹が減る時間だ

「食堂いこっか」

「ですね、私もおなか減りました」

そういうと食堂に向けて歩き出す俺と先輩

案の定女子のたまりが出来ていて

「きゃー神谷君と会長がー！」

一緒に歩いてるところを見られ

「お姉さまがー私のお姉様がー！」

「神谷君と会長の関係がー」

「会長ずるいー！」

「美人で完璧で彼氏もちなんてー！」

など色々な声が聞こえる

まあそれもその筈IS学園だからなここ

そんな中

会長が俺の左腕を掴み

「せ、先輩これって」

「そんなことより、行こうかみちゃん」と笑顔で自慢するようになつたもんだから

「キヤー！」などの女子達の声がいっそう激しくなった

(うん、もうだめだこりゃ)完全に諦める俺

食べている間でも終始べつたり状態だったので当然色々当たってるわけであり

「先輩、その、あたってます・・・」

「かみちゃんのえっち」

(エッ、今のって俺が悪いの?いや、俺は悪くない)

「悪くないと思つたでしょ」

(なんでばれたんだよ)

そんなこんなで波乱の夕飯が終わり

「さて、月影のメンテナンスでもしますか」

そういうと、メンテナンスルームに向かう俺

会長は、先に自分の部屋に帰った

そして、メンテナンスルーム

まあ、メンテナンスルームって言ってやる事っていったら能力がどんなもんなのが見るくらいだ

とりあえずディスプレイを開いて、色々見てる

「やっぱりこれか」

何かが圧迫していたと思いディスプレイを見る

ディスプレイには、” 限定能力 天極 ” と書かれていた。  
色々システムを見てるともう時間は、8時くらいになっていた

「帰るか」

メンテナンスに見切りをつけると自分の部屋に戻る  
この時、気づいていればよかったの心底思った

## 楯無の2ターン目

いつもどおり自分の部屋のドアを開ける

いつもどおりの二つのベッド

今までいらないと想っているベッド

それにしても、いらぬいなぐ役に立たないなぐと思うベッド  
そんなベッドも役に立ったみたいだ

案の定入ってみるとそこには、

「おかえりなさい」ベッドには、下着とワイシャツ姿のラフラフな職場放棄先輩がいた  
ジーッ・・・

背後から突き刺さるような視線と

「なんか文句言われたきがする」

「何も言ってませんよ?」

「心の中で」

「心理読者があんた?」

若干ほんのちよっぴり驚きながら先輩に目をやると

「(色々見えとるかな)」

真っ先に思ったことはあること

健全な15歳、そうまさに思春期なのである

スタイルは、抜群なので慌てて洗面所に逃げ込む俺

「あれえ?かみちゃんどうしたの?」

今の行動に驚いている先輩と

「先輩、その、服着てください!」

「着てるわよー」

「ズボンですよー!」

パンツじゃないから恥ずかしくないもん!という幻想で済まされるレベルではないのである

「まあまあこつちにきなさい」

そういわれて先輩のところに見ないように歩いていく俺だが、甘かった  
バタンツ!

俺がうつ伏せで倒れその上に馬乗りにつてきた先輩

「まあまあこんなかわいい後輩を野放しにしておくわけにわいかな  
いからね、それと、私重くないでしょ、日ごろ鍛えてるし」

「まあ、そりやそうですね普通の女子に比べたら、ってか、俺のかわい  
い要素なんてあるんですか!？」

「あるわよ〜それと、かみちゃんよくわかってるわね」

「(・・・俺のかわいい要素ってなんなんだよ)」

俺は、自分の精神を保つためで精一杯だ

そして先輩がうつぶせになってこういった

「さあさあ、私にマツサージしてくれたまえ」

「はい?!」

唐突なことに驚く俺

「会長ですからね〜」

「(毎回思うが、威張っていうもんじゃねえ)」

「はやくう〜お尻が痛いんだよ」卑猥な表現 + 駄々をこねる会長  
健全な男子高校生である俺がこんな時期にしかもこんな学園でナイ  
スプニングを求めていたわけではないがさすがにこの状況は精神的  
にも倫理的にも問題になるであろう。

「俺っすか？」

「それいがいこの部屋に誰がいるっていつの？」

「・・・」

「もう聞いているんだよ」

「なにを？」

「君がマッサージが上手いって事」

「誰から聞いたんですか？」

「やってくれたら教えよ」

「・・・」

（わかった、もう神は、俺に無我の境地に逝けとしか言っていないだ）

ガシッ！

そういうと、お尻をマッサージし始める俺、なぜか鼻があつい

「かみちゃん？」

「なんですか先輩」

「鼻血でてるよ」

「はい・・・」

そういうしかない状況だった

その後俺は、思った

散々だー！と

その翌日、2組に中国から専用機持ちが来た  
ツインテールのあいつがきた

学園の評判が下がることはくれぐれも慎みましよう

「まったく、クソ暑いわね」

故郷の中国は涼しかったと想う、ちなみに、今はIS学園の施設見学中

ちょうど第2アリーナを見終わったところである

そして、第3アリーナに入ると

「うらああ！まてやこらああ！」

「うわっ！鬼だ！悪魔だ！」

「うるせえええ！」

「IS使ってるのにこれかよおおお！」

「黙って捕まれやつあああ！」

「嫌だあああ！」

木霊するのは男子二人の悲鳴

アリーナを一夏と全力鬼ごっこ、俺は一夏を生身で追いかけているのに対して一夏はISを使っている

お互い五分五分の攻防、それにしてもめちゃくちゃな鬼ごっこ

「(・・・なんなのよアレ!?)」

転入初、ものすごいシユールな光景を見た気がする、それもそうだろう、幼馴染が追い回されていたのだから

ISが人間に追われていた、その光景はさながらシユールだった

俺は自分の席に座りながらつぶやいた

「幼馴染ね〜」

「ああ〜幼馴染か〜そういや、鈴と篝だな〜今のところ」

「このフラグ王」若干妬みながら

「うるせい、日 のラ王見たく言っな」

頭の中にラーメンが浮かぶ一夏

「いや、そこは北斗のдарう」

「なんだ・・・と・・・」

「ハイ、ネター本はいりました〜」

「あつ、テメエ！」

周りから見たらまさに漫才状態

「なあ、セシリア」

「なんでしよう篝さん？」

「あれはなんだ、私も話に入りたいのだが？どうすればいい？」

「それは神のみぞを知ることですわ」

「わかった、早速読んでくる！」

「（どうして、こうなった）」なにか壮大な勘違いをされたセシリアであった

若干手遅れなきがする主に二人のせい

ガッラララ！

鈴が見た光景

「テメエこら！何王道語ってんだ！百年はええよ！」

「うるせえ！王道語って何が悪いこらあ！」

「カップラーメンの王様っていつたら、日 のラ王だろ！」

「んだとお！いや、麵職人だろ！？」

「貴様、中学時代のラ王の上手さを否定するきかあ！」

「そっちこそ、麵職人を否定するかああ！」

男子二人？がものすごい形相で言い合っていた  
どうしようもないがみ合いは続き

「いいだろう、俺の信念にかけて神谷！テメエをぶちのめす！」

「上等どころああ！」

「アリーナ表にでろおお！」

散々な光景を目にした二人、この後二人はしっかりと、千冬さんに  
怒られました

その後

「で、どうなんだ？クラス対抗別トーナメント？」

「ああ、初戦の相手は二組らしい、専用機じゃないから楽だろう  
今のところ代表は無条件で俺

「で、相手は誰なんだろうな？」

「まあ、分からないから面白いだろ」

「まあな」

ガラガラガラ

「おしいわね一夏、二組代表はこの私、中国代表候補鳳鈴音よ！」

ドアを開けて出てきたのはドヤ顔をした二組代表だった

「(いい感じのドヤ顔だな)」

もはやそのレベルでスルーできるレベルだった

その子はツインテールでちっさめの猫みたいな貧しいそうな感じの  
女の子だった

とりあえずオブラートに入ったから問題ないだろう

「で、クラス代表は誰なのよ？もしかして一夏あんたなの？」

「いや、今のところ、こいつさ」

そいうといがみ合ってた俺をさす

「あんた誰？」

「うん？ああ、紹介するよ、空から落ちてきた。」

「セイツ！」ブンツ！突如、黒祐が構えて拳を放つ音  
グシャ！一夏の顔に拳が当たる音

ドンガラガツシャツアアン！ ブツ飛ばされる一夏の音

「なっ！一夏！」

転校生である鈴が目の前の光景に素で驚かれてた

「こんにちわ、神谷影一です」そして何事もなかった用になこやか  
スマイルで言う俺

「こ、こんにちわ、鳳 鈴音です・・・」思いつきり衝撃を受けた  
顔をしていた

「（・・・IS学園、思ったより、壮絶だわ）」

思いつきり学園の評判が誤解されてたのであった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1269s/>

---

IS<インフィニット・ストラトス>Knight of Messiah

2011年11月10日08時21分発行